

## ハンガリー動乱50年:ナジ・イムレ処刑50年

盛田 常夫

去る6月16日、ナジ・イムレ処刑50年にあたり、ハンガリーでは各種の追悼集会が開かれた。ハンガリー動乱とナジ・イムレの運命について本誌でも詳しく記したので（筆者のHPに掲載）、ここでは繰り返さない。1956年のハンガリー動乱時に首相の任にあったナジ・イムレと行動を共にしたナジ側近たちは、ソ連が樹立したカーダール政権の人民法廷で裁かれ、1958年6月15日に「反革命」の汚名を着せられて死刑判決を受け、翌16日に絞首刑に処せられた。こうしてナジ・イムレはハンガリー動乱を象徴する歴史的な人物になった。

### ナジ・イムレ復権

19年前の6月16日、ハンガリーはナジ・イムレと側近たちの復権を行い、再埋葬式を挙行了。当時、日本大使館に勤務していた筆者は外交団の一員としてこの埋葬式に参加し、翌7月6日に日本国大使とともに社会主義労働者党本部に新党首ニエルシュ・レジュエを訪問した。その折に、当日朝のカーダール訃報が口頭で伝えられた。カーダールがナジ復権を知っていたかどうかは分からないし、それを知り得たとしてもその意味を理解できたかは分からないが、死の直前までライク・ラースローとナジ・イムレの亡霊に悩まされていたと言われる。

ナジ・イムレ復権とカーダール死去は、ハンガリーが30年余にわたったカーダール時代に別れを告げ、新たな時代を迎える象徴的な出来事であった。ハンガリー動乱は「反革命」でなく、「革命」であったと再評価された。反革命の汚名を着せられたナジ・イムレは、今度は56年ハンガリー革命の英雄となった。そのナジ・イムレの処刑50年が今年にあたる。

ナジ・イムレが革命の英雄であれば、今度は逆にカーダールは反革命の象徴になるのだろうか。事は単純ではない。

今、ハンガリー人は皆、「56年革命」と表現する。少し前までは「56年反革命」だった。しかし、人々の心情は複雑である。動乱の評価と政治家個人の評価は別なのだ。社会主義労働者党本部で催されたカーダールの葬儀には、万を数える人々が参集し、党本部周辺はドナウ河沿いの沿岸道路まで、参列する人々の長蛇の列が続いた。ハンガリー国民はその光景に、改めてカーダール人気を感じ取った。

ナジ首相に正統性を付与すれば、カーダール政権の正統性が消滅する。しかし、30年にわたるカーダールの統治に正統性がなかったとは単純には言えない。まさに、これこそ歴史と現実における正義と正統性の典型的な問題なのである。

### ショーヨム大統領の問題提起

ジュルチャーニイ首相はナジ・イムレ処刑50年を追悼する特別国会へ、大統領、野党党首、外交団を招いた。これにたいして、FIDESZとKDNPの党首は招聘を受けず、大統領もまた参加の意思を表明しなかった。FIDESZとKDNPは不参加の理由を明示しなかったが、ショーヨム大統領は他の追悼集会において持論を展開し、暗に首相主催の追悼国会を批判したのである。各メディアはこれを取り上げ、多くは大統領の行動を批判したが、ショーヨム大統領の持論に耳を傾ける必要があるだろう。

ジュルチャーニイ首相を初めとする社会党の中には、56年動乱を単純に「革命」と規定できないと感じている政治家がそれなりの数で存在する。56年動乱で死刑判決を受けたグンツ元大統領もまた、「人の数ほど多様な56年が存在する」と語っている。ジュルチャーニイ首相演説でも、この辺りは不明瞭で、10月23日の動乱勃発時には革命だったが、次第に不明瞭になっていったという趣旨のことを述べている。

ショーヨム大統領はまさにこの動乱評価の曖昧な両義的解釈を批判している。「56年革命」の評価は両義的なものではなく、一義的なものでなければならない。いったん「革命」と規定したからにはその評価は一義的でなければならない。ナジとカーダールの双方を評価するような両義的評価とは一線を画さなければならないというのが、大統領の持論である。

ショーヨム大統領によれば、1989年6月16日の再埋葬式でナジ再評価は決まっておき、体制転換の重要なモーメントであったという。同年10月23日に当時の社会党の暫定大統領スーロシュが行った共和国宣言は、形を変えただけの社会党がヌエ的に行った行事であり、体制転換の本質的事件を構成しないとまで断言している。

56年動乱を革命とし規定しながら、カーダール主義の継続性（正統性）を暗に認めるのは誤っており、56年評価は明瞭かつ一義的でなければならないというのである。

## 動乱評価の両義性

ショーヨム大統領は革命の両義的評価を排除する事例として、昨年に提起されたホルン元社会党党首にたいする叙勲拒否の事例を指摘している。動乱抑圧側に立ち、動乱後の政権を擁護する政治家は、体制転換後に樹立された共和国の国家叙勲に値しないという。この問題についても本誌で論じたのでここでは再述しないが、明らかにホルン叙勲はジュルチャーニイ首相が党内における地位を固めるために、重鎮のホルンの誕生日に合わせて叙勲申請したものだ。この胡散臭い叙勲申請に、ショーヨム大統領が署名しなかったのは一つの見識である。そして、それはまた、社会党の56年動乱評価における両義性を再び暴露することにもなった。

ジュルチャーニイ自身、私生活において、カーダール時代の継続性を、身を以て体験している。妻の祖父でハンガリー共産党の政治局員だったアプロー・アンタルがカーダール政権時代に取得した邸宅が、ジュルチャーニイの現在の私邸である。アプロー・アンタルは40年近い党

生活のほとんどを、最高指導部の政治局員として過ごしており、ライク処刑時においても、またライク復権時にも、さらにはナジ処刑時においても政治局員だった経歴をもっている。アプローの政治歴はまさに両義的という評価を通り越して、歴史の激動の中で、常に権力の中核に身を置いていた不思議な政治家である。どの権力者にとっても都合の良い存在だったのだろうか。見識のある政治家は、このような過去をもつ政治家の遺産を私邸として使わないだろう。

ショーヨム大統領がジュルチャーニイ首相の招聘をうけなかった背景には、こうした政治家個人としてのけじめの問題もあろう。襟を正して、カーダール時代との決別を告げるなら、アプロー・アンタルの邸宅を出るべきだという考えがあっても当然のことだ。もっとも、こういう潔癖さは日本人には理解できても、ハンガリー人の多くには理解されない。それがまたハンガリーの問題でもある。

## 個人的体験と体制存立の論理

一つの歴史事件の評価と個人の体験を切り離すことは、同時代人にとって非常に難しい。56年当時の年齢、職場、居住地、生活環境によって、個人として体験した56年は、グンツ大統領が言うように多種多様だろう。後の政治的評価によって、当時の個人の政治行動を断罪するのは硬直した見方である。

他方、政治体制として、56年以後の体制をどのように評価するかは、個人体験の多様性とは異なり、明瞭な歴史的評価が下される。どのように考えようが、56年動乱で誕生したカーダール政権には、少なくとも政権誕生の経緯には、正統性がない。ソ連が構築した傀儡政権であることは明々白々である。

したがって、個人が体験した56年動乱およびその後の生活の評価と、56年動乱によって樹立された政権（体制）の評価とは区別して考えなければならない。56年の体験が多様であるから、56年動乱後の体制評価も多様であって良いということにはならない。逆に、56年後の政権評価

は一義的だから、56年動乱時の個人の役割が一義的に確定できるとは言えない。

体制の評価が決まれば、国家としてのけじめがある。それは個人の多様な体験を否定するものでないが、国家としてそれぞれの個人を顕彰できるかどうかは、国家の存立価値にかかわっている。したがって、ホルン社会党元党首の場合、個人として動乱抑圧側に立たざるを得なかったという個人的事情は了解されても、旧体制を否定して成立した共和国国家が、旧体制を肯定する人物を顕彰できないという論理は筋が通っている。国家として、56年以後の体制の両義性を認めることはできない。

この点は「靖国参拝」をめぐる議論と似たところがある。個人として戦争に参加した人々には、多様な生活と体験があったことは否定しようのない事実であり、個人としての生き様が後年の体制評価によって断罪されてはたまらなさと感じる人は多いだろう。他方、日本は戦後、戦前の天皇制軍国主義体制の否定の上に立って議会制民主主義国家として出発したことも明らかである。とすれば、個人として「靖国神社」へ参拝することは何ら非難されることではないが、政治家が意図的に参拝し、軍国主義の犠牲者を祭り上げることに積極的な意思を表示すれば、戦前の体制否定という一義性が否定されることになる。

この事例のように、20世紀には膨大な人命を犠牲にしてきた歴史事件が多発し、正統性が疑われる実に多種多様な政治支配が存在してきたために、個人と体制という矛盾した関係から完全に解き放たれることはできない。

## 体制理解と個人の役割

2006年から2007年にかけて、本誌において「ハンガリー動乱50年」の連載を行い、動乱からナジ処刑にいたるプロセスを再考した。現在、本誌では56年動乱に至るプロセスを連載しているが、それは「56年動乱」を評価する場合、動乱の10日余の分析を行っても評価することはできず、動乱に至る歴史的過程や動乱以後の政治

過程を綿密に考察することによって初めて、その歴史的意義を明らかにできるからである。

そのことは56年動乱という事件に限らず、ナジやカーダールの個人としての歴史評価においても必要なことである。ナジが英雄視されるのは、あくまで「56年動乱の殉教者代表」ということであって、ナジ個人が動乱前から対ラーコシ独裁に果敢に闘い、動乱発生時にはハンガリーが進むべき道を明確に示したからではない。実際には、この双方の面において、必ずしも高く評価される政治家ではなかった。しかし、歴史の歯車によって、ナジは56年の殉教者になり、「56年革命の象徴」になったのである。

他方、カーダールはナジと行動を共にしながら、拉致されたとはいえ、ソ連の傀儡政権樹立の協力者としてブダペストに戻ってきた。この意味でナジとは対照的である。

しかし、ハンガリーにカーダールが存在したことは、ある意味で幸運なことでもあった。ソ連の保守派はカーダールではなく、ソ連亡命歴をもつ政治家を頭に据えることを画策していたからである。ソ連占領下という現実の中で、ハンガリー民族が取り得る選択肢は限られていた。そのカーダールに権力出生の正統性はないが、ソ連から距離をとる「柔らかい独裁」体制の構築に励むことによって、ソ連圏内部での相対的な自由と豊かさを確保した。統治の始まりに正統性はないが、統治が持続することで「事実としての正統性」が生じてくる。まさに、カーダール体制はそのようなものであった。

ただ、歴史の評価は常に変わる運命にある。ソ連圏でより増しな体制を構築したカーダールは評価されるが、究極のところ、ソ連型の社会主義の枠を破ることができなかった。そして、長期の「柔らかい独裁」の弊害は、体制転換以後の市場経済化プロセスで明らかになっている。鎖国の「ぬるま湯」的体制に慣れ親しんだ国民が、市場経済の厳しさを正面から受け止めることは難しい。現在もなお、ハンガリー社会にはカーダール体制の慣性が支配している。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)